第Ⅳ部門　　土木技術者としての生き方意識に関する調査

近畿大学理工学部土木工学科　正会員　竹原幸生
近畿大学理工学部土木工学科　正会員　北川博巳
近畿大学理工学部土木工学科　正会員　武田慎治
(株)地域環境システム研究所　○正会員　花嶋温子

近畿大学理工学部土木工学科では、平成７年度より、ボランティアに単位を認定する「社会奉仕実習」科目を開講する。理系では全国初の試みなので、その教育効果を測り、土木教育における人間性教育の一貫として、科目を総合評価することを計画している。本稿では、その基礎となる学生の意識を「土木技術者としての生き方意識」としてアンケートした結果を報告する。

１．アンケートの概要

学生自身は、将来職業人として働いていく上で、どのような資質が重要であると考えているのか。これを測るため、図－１左側のような２０項目のインベントリー（評価項目）を設定した。「豊かな感性」と「職業倫理」の項目群を設定したところが特徴である。アンケート作成の段階で、それぞれの項目をより具体的で分かりやすい文章に変え、シャッフルして項目が群ごとに偏らないように工夫した。

それぞれの項目についての重要度を「あまり重要でない」「少しは重要」「まあまあ重要」「かなり重要」「必要不可欠」の５段階で聞いた。

アンケートは土木工学科１～４年生と、比較対照のために、理工学部の機械工学科、建築学科、化学科、商経学部の商学科、経済学科、文芸学部の文学科、法学部の法律学科、経営法律学科の２年または３年生を対象に行った。アンケート回答者数は、合計１２５５名、全て近畿大学の学生である。

２．結果と考察

アンケートの回答の「あまり重要でない」から「必要不可欠」に、それぞれ１～５点を配点し、項目毎に平均点を計算した結果を図－１に示す。また、項目毎の標準偏差（土木工学科のみ）を図－２に示す。

平均値（図－１）　近畿大学の土木工学科の学生は、他学科の学生に比べて、使命感や、大勢の人との協調性や、リーダーシップなどが重要だと考えている。「小動物・環境への配慮」は他の理系の学科と同じく文系グループに比べると高く、「弱者への配慮」は建築と土木だけが重要性を高く評価している。

一方、土木の学生は、「チャレンジ精神」を他の理系学科より重要視していない。「遊びやゆとりの精神」は、調査した全ての学科の中で土木の学生が一番低く評価していた。「仕事をする上での芸術的センス」についても土木の学生は低く評価している。また、土木の学生は機械工学科や化学科に比べて、「金銭的誘惑に負けない」や「地位、権力におもねない」といった項目を重要視しない傾向がある。

標準偏差（素－２）　土木の中では学年が上がるにつれて標準偏差が小さくなってくる。特に「大勢の人との協調性」、「常に新しい技術を学ぶ努力」、「社会的常識、礼儀」の項目で顕著にその傾向がみられる。これは大きな教育効果とみることもできる。しかし、一様に「土木の学生らしく」なっていくことについては議論の余地がある。

３．阪神大震災への学生ボランティアの派遣

阪神大震災に際し、ボランティアへの社会的要請が非常に強くなった。近畿大学の土木工学科では、１年生（新２年生）を対象に、４月から開講する予定の前記「社会奉仕実習」を２月末に前倒しにして開講すると共に、単位に関係なく２～３年生からもボランティアを募ったところ、予想を上回る３００人の応募があった。今回のボランティア活動の体験が、彼等の生き方意識に影響を与えるのか、体験後の学生に再度アンケートに回答してもらった結果を、講演の際には報告したい。

Kousei TAKEHARA, Hiroshi KITAGAWA, Shinji TAKEDA, and Atsuko HANASHIMA

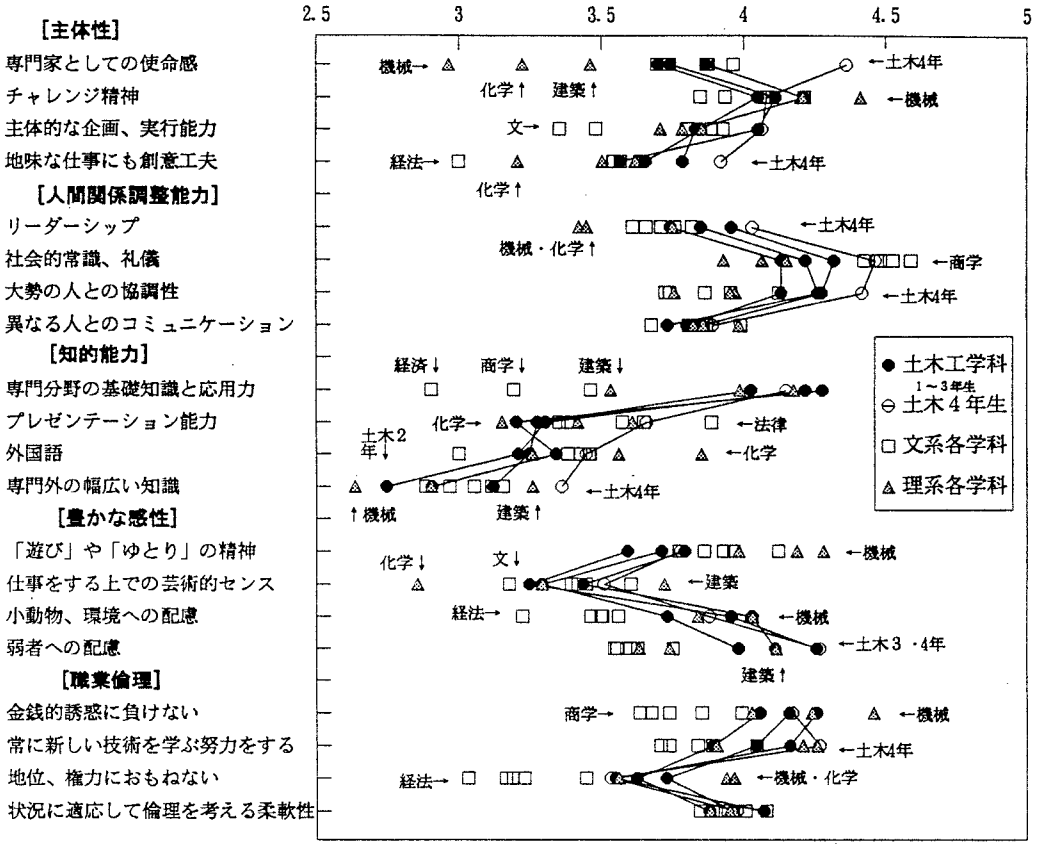

図-1 「職業人としての生き方に関するアンケート」回答の平均値

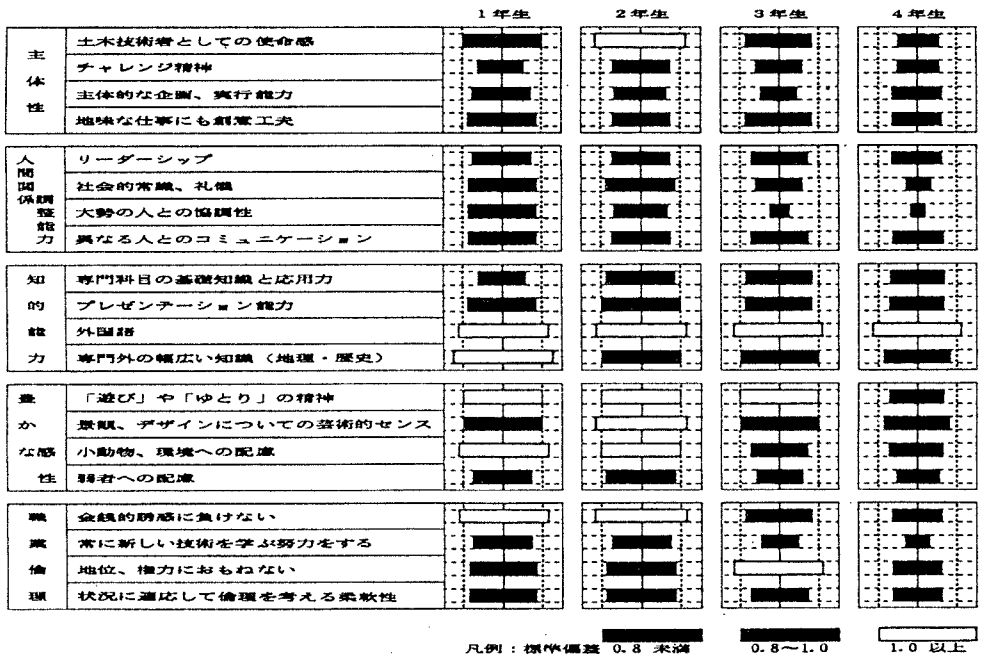

図-2 「職業人としての生き方に関するアンケート」回答の標準偏差（土木工学科）